

螻蛄の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 最終回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

連載三年かけて、二十年以上前の私と職場の一年を振り返ってきた。あらためて思うのは、私だから容認されていた事もあるに違いないことである。しかし、その時私は決して自分のことを特権的であると思っていたわけではないし、だから許されると思っていたわけでもない。

むしろそれは、年次休暇をみんなが持っているのに、つかわないうるのを常識にするような職場の雰囲気不健康だと思っていたことと重なる。病気や身内の不幸で休みを取ることに寛容で、楽しみや喜びのための休暇取得には抑圧的な空気が、公務員生活にはずっとあった。私の行動はそれをシステム論的に変化処方したことになると思っている。私のチームの年休消化率はグーンと上がった。他から異動できた人たちが、一番実感したことだ。

また私が管理職の時、課員であった人の運命が大きく転じたことがいくつかあった。もう子どもは生まれなかった夫婦の所に、12年ぶりに第二子が誕生した。独身主義を主張し、シングル女性論者だった人が、7歳年下の男性と結婚した。起こらない、出来ないと思われていたことが動いている印象があった。

もっともその一方で、川崎二三彦くんがよく言うように、「団さんだから出来ることで、真似なんかしようとしたら、大変な目にあう！」というのも、最近になってそうかもしれないと思う。

しかし、世の中全般が行儀よくなってしまおうと、あちこちの権力者は横暴化する事実は覚えておきたい。若い人には分からないことだから、これを伝えるのは、そういう歴史を知っている者の責務だろう。働く人たちが黙っていると、不作法で厚かましい条件を提示してくるのは雇用者側の常だ。なにも二者対立的に「資本家はー！」なんて大声をあげているのではない。公務員組織だろうと、そこそこの大企業だろうと、自分も宮仕えの中間管理職が無自覚に、簡単に手先になるのである。その人達は保身のために、そんなことは分かっておこなう。立場上・・・なんていうのだが、たいてい、自分の立場の話をしているだけだ。女子柔道界の暴力問題で、メダリストで役員の一員でもある山口香さんのとった立場は立派だったと思う。私もけっして得意ではないが、交渉というのは気の重いものである。

さて、次回からはpart 2に突入する。思いついている企画が二つあり、まだ決めかねている。どちらにしても「社会システム変化への介入」というメインテーマに変わりはない。どの角度から行くかだけだ。乞う、ご期待。

(2013/03/15)

1990年12月

12/1-2

SAT 分科会と基礎講座。これは各担当者に任すほかない。バラツキはあったに違いないが、おおむね好評。

SUN ディープ・インタビュー、これがこんなに当たるとは思いがけなかった。司会をしていて、あまりの展開に何度か感情の流れを自分で遮った。会場は一つになって、誰も空気を乱さず、逃げることも、照れることも、怯むこともなく、この場に居合わせる幸運をつかんでいた。こんなことがやれるのだなあと、つくづくみんなの力の大きさを思った。いいスタッフに恵まれることが、最大の幸せである。

ディープインタビューが好評であったことも、同じような企画をこの後も引き継いで誰かがやった記憶もあるが、詳細は覚えていない。

こんなに感激しているのに、このざまだから歳をとるのは残念だ。せいぜいツイッターにでも記録することにしよう。

インタビューさせて貰ったのは正津房子さんだったと思うのだが、それもおぼろげ。

正津さんとはいつの頃からか、親しく交流するようになった。次男を連れて出かけた我が家の親子旅第二弾でニューヨークに行ったとき、正津さんもNY在住だった娘の所に来ていて、待ち合わせをしてSOHOをぶらぶらしてCafeでダラダラだべった。

観光なんかちっともしないで、娘のアパートで暮らしている変なおばさんだった。二人の娘とその夫や彼氏とも、この後も何度か会うことになった。

私は自分からはあまりこういう事はしない人間だと思っていたので不思議だった。

この時のことをマンガ「親子旅・NY編」として雑誌に連載したこともある。

12/3 MON 興奮覚めやらぬ朝。北海道岩見沢児相からの参加者が、家族療法室の設備を視察に来る。丁度はいっていた面接を見ていった。

沢木耕太郎著「チェンスモーキング」を読み始める。氏のものを読むと文章が書きたくなる。それから、灰谷健次郎著「砂場の少年」も読み始めた。

日本中の児相から見学者が訪れていた。年度末に向けて、京都にあるというのは、こういう事だった。京都見物を兼ねての出張に、うんざりするほど付き合った。そんなことが出来ていたのは、まだ良い時代だったのか。

灰谷本は全く記憶にない。沢木本は装丁まで思い浮かぶ。この1月にNHKスペシャルで「写真家ロバート・キャパ」の一枚の写真に関するドキュメントを放送した。長年沢木さんがテーマにして取材していたものだった。月刊文藝春秋新年号に掲載されていたもので、単行本も2月に出る予定。その映像である。

12/4 TUE 職員会議の後、精更相のN川さんと話す。午後の福祉部会交渉で児相の人員問題。当局も分会も、問題を正確に把握することを放棄している。その場その場で、つじつま合わせのような言論をつかっていると、自分自身が言葉を信じなくなってしまうことに気付いていないのだろうか。

細かい事情までは覚えていないが、世間に溢れる現実に合わせて、こういう言葉の使い方は今も健在で、原発事故問題への関係者、研究者の言いぐさがこれだ。

こういう事の結果は必ず出る。京都府の児相が今おかれている事態は、この時に始まっていると私は思う。それまで京都府は、働く者も組合も、仕事をとても丁寧に扱おうとしてき

たと思っていた。

今振り返ると、このあたりで私が、当局も、組合も、信じられない思いを抱えたのかなと思う。自分の思い通りにならない！とほざいてただけかも知れないが、私利私欲はなかった。私にとって、児童相談所で良い仕事をするのが何ものにも代え難く大切なことだと思っていたが、周りのみんながそうだとは限らないと思いき知らされる出来事が浮かんで消えていた。

12/5 丹後・久美浜町教育研究会に呼ばれて、話しに行った。特急・丹後エクスプローラーで約三時間。新幹線なら東京に着いている。

こういう仕事をかなり積極的に受けていた。当時だって、頼まれ講師に関しては、イロイロ言うさく言う人も状況も存在した。私が無視していた理由は、そこに理はないと思っていたからだ。

困われた雇用関係の中で生きているのではなく、この時代の一員としてあると思っていたので、頼まれたのが良い仕事なら、公務員である私の存在と矛盾などするはずがないと確信していた。

12/6 夜、KISWEC(京都国際社会福祉センター)の家族療法研修の1991年プログラムの打ち合わせをする。関わりはじめてから6年が過ぎた。

ここで既に六年目という事は、間もなく三十年になるということだ。継続は力なりと思っているし、そうしてきたが、それでも三十年は凄くと思う。

やりたくても継続できない事情は、やまのようにある。継続するものは不変化ではない。日々、変化し続けているものだけが残って継続可能になる。

12/7-8 児童福祉施設中堅職員研修③。アドラー心理学について、毎年来てもらっている堺教育研究所の萩さんに話してもらった。二日目は京都児相の川畑くんが、目先の変った息抜きプログラムをやってくれた。

土曜の夜は「露路裏人類文化研究会(ロジケン)」の二回目。フィリピンンの国際農村再興研究所(IIRR)の Dr. フラビエルさんがゲスト。マグサイサイ賞を受けた精力的な活動家。

この会は今まであまり触れることのなかった世界と、触れ方の違いも含めて、見せてくれる。ここではまだ動けない感じた。

自ら、あるいは誘われて、興味の持てることには積極的に動き回っていた。根底で、自分が活動することが、公務員として有益であるに違いないと考えていた。

下世話な公務員批判に「休まず、遅れず、仕事せず」というのがあった。だから「休んで、遅れて、仕事する！」をやってやろうじゃないか！というのが何処かにあった。

ロジケンに興味深く、でも、こういうものが作り出す、人と人との関係の難しさも感じた取り組みだった。何処か自分の居場所ではない感覚がありながら、結構長く例会参加していた。

12/10-12 月例の相談判定課会議を済ませて、大阪空港へ。明日・明後日島根県出雲児相の依頼で講演とワークショップを出雲市です。飛んでいるのは一時間くらい。出雲児相の細川福祉司が迎えてくれて、出雲大社に案内してくれた。

夜は歓迎の宴。酒を飲まない僕としては、なくていいのだがあまりゴチャゴチャ言わないことにしている。11日は出雲市の教育・福祉関連の人達が多数集まって

の出雲児相 30 周年記念講演会。12 日は
島根県児相職員中心のワンデイWS。

その後、紆余曲折ありながら、また今、まっ
たく別の窓口経由で年に三回松江に通ってい
る。

継続は力なりと思うが、その中にはやむを
得ずの中断や、再開という巡り合わせもある。
どんなことが未来に、どのように繋がるのかは、
誰にも予言できない。

そうそう、この時の宴席は、県の幹部と児相
長と高級料亭での接待だった。酒を飲まない
私には、何の関心もない銘酒が登場して、酒
飲み達は盛り上がり、「そうですか、先生は
お飲みにならない、残念ですな」と言いつつ、
盛り上がりつつあった。今じゃもう、そんな宴会も
すっかりなくなった。

12/13 受理判定処遇会議。夜は忘年
会。三条小川通の GRILL「NORMANDI
E」。商店街のレストラン。メニューは厨房
の上にチョークで書き出してあって、雰囲気
はパリの下町レストランそのもの。安く
て旨いコース料理。幹事さんヒットです
ね。

個人事業主として一人で動くことが多くなっ
て10数年、一番減ったのは宴会だろう。元々
多かったわけではないが、それでも歓迎会、
送別会、忘年会、暑気払いなどといって、職場
や有志の会食はあった。酒を飲まない私には
面倒な付き合いではあったが、そういうこと
でもない、ほとんど出会わない人、出向かない
場所というのものもあることに気づく。



12/15 午後頼まれていた高槻市北大冠小
学校 PTA の講演。中学生時代に駆け回っ
ていた地域で、親になっているそのころの同
級生達を相手に話をするのは不思議な気
持ちだ。

長年、京阪津(神ではなく津、大津の津)エ
リアという地域社会に暮らしていると、時にこう
いう巡り合わせに会う。交通網としてはJR、阪
急、京阪が中心。他に近鉄も走っている。

車を運転しないまま歳をとった私には、世間
地図が鉄道網と重なって出来ている。道路網
で書き換えの起きた人たちや、最初から道路
マップで距離感が出る人とは違った世界を生
きている。大冠なんて駅から不便なところ…
とっていたが、車ならすぐだ。

12/16 サンタクロースはおもちゃ屋さん
に、それがどんなものかも知らないまま「あ
むあむ卵」というものを買に行きましたと
さ。

これを読むまで、この時点で娘が8歳だった
ことを失念していた。そうか、ついこの間の職
場の出来事であるような気がしていたが、娘
は今、30歳になっている。大昔のことだと言
われても、否定できない時間が過ぎている。

12/17 園部で教護院の先生達と児童福
祉司との懇談会。進路を控えた子供達の
ことを中心に話し合う。夕方京都に戻って
「基調公演」の打ち上げ。評判がよかった
ので、和気あいあい。

業務のコンテンツばかりではなく、業務を執
行する土壌の耕しや懇親を大切なこととして、
日常に含めている。

対策協議会や地域連絡会というのではなく、
懇談や懇親をせっせとおこなっている。古臭い、
無駄な…と私たち世代以降が思うようになっ

たことだ。しかし、仕事がこういった土壌のうえに構築されていた。

12/18 教護院の寮母さんの研修で、福井副校長ほか7名が来所。二時間程、治療・指導について話す。兎相で19年目になるが、こういう形でお目にかかるのは初めて。

24時間体制の生活寮に関わっている人には、勉強に出かける時間がなかなかない。まして、揃って何処かになんて、寮の留守番体制のことを考えると無理だった。

それを一工夫して、揃って来談されたのだった。昔の同僚、副校長がアレンジしたのだと思うが、そういう小さな変化を作り出すのもなかなかだ。

12/19 家族療法のビデオ・カンファレンスの日。SVIに事前情報なしで、面接ビデオを見てもらう。いろいろ情報に絡みつかれた担当者や我々の視点が鮮明になる。

外部から家族療法のスーパーヴァイザーを招聘して、定期的カンファレンスをしていく。そしてこういう試みもだんだん負担になってくるのだった。不足を言うのは簡単だが、条件整備されると、その活用の質を維持向上してゆく辛さがのしかかる。付いた予算を、適正かつ有効に執行するのは難しい

不足に文句を言って評論しているのが一番楽なんだということを実感した。継続するのは本当に困難。質を維持しながらというのはもっと困難。

12/20 受理判定処遇会議の後、少年鑑別所に面会に行く。今年二度目の収鑑というのに、気楽そうなので困る。会話が途切れると、気をつかって話題をふってきたりする。笑顔で「困った奴だなあ」と言いたい少年。

12/21 家裁の調査官と弁護士が来訪。月末に審判のある昨日面会の少年について話す。夜は久しぶりに編集者講座。あまり面白くなかった。

これは誰のことだ？と思い出そうとするが、多分彼のことだったと思う少年はいるが、記憶がおぼろげだ。記憶というのは不思議なメカニズムだと思う。だから、いろいろ解釈したり出来るのだろう。

12/22-24 暮れの押し詰まった時期に三連休。年賀状作りをこの時にできるなどか、溜まった用件が一挙に片付くなどか、思っただけの三日間だった。

定番である。時間があると、仕事ははかどらない。あわただしい方が片付いていく。でも、そのだらだら出来る感じが贅沢なのだ。

年賀状はずっと欠かしたことがなかった。それが2012年年末、つまり2013年の年賀状を飛ばしてしまった。年末、あれこれ片付けるべき用件が多すぎて、その気になれなかったのだ。

そのかわりに、1月から2月にかけて開催した立命館大学・朱雀キャンパスでの家族漫画展の案内を近畿圏中心に250通送った。例年の半分、関西以外の方には失礼したままだ。

12/26 WED 宇治兎相で業務検討会議。面接を続けている少年が、今年二度目の家裁審判。ほぼ少年院だとの予測の中で、保護観察になり、引き続いて私が家族面接をすることになった。ほっとする。

どんな家族面接になったのか、記憶にない。覚えていてもおかしくないのだが、このケースだという確信が持てない。忘却はこのように曖昧化して訪れるのか。

12/27 THU 今年最終の受理判定処遇会議。夕方、娘の正月用の服を選ぶのに付き合わされる。デパートを慌ただしく動く疲れるのは、古典的だか本当だ。

めったにないことだったからだろう、よく覚えている。貧しかった時期に、デパートの子ども服売り場で、ピンクの上下を買ったからだ。妻が大事に着せていたが、子どもは直ぐ大きくなってしまった。

後にも先にもこういう経験はないと書きかけて、そうではないことを思い出した。これに味をしめた妻が、こういう行動に私をかり出すようになった。その結果、時々こんな付き合いをすることになったきっかけがこの日だ。

12/28 FRI 御用納。午後から以前出していたミニコミ「四人囃子」のメンバーが集まって、昨年からはじめたビデオ版年刊「四人囃子第2号」収録。去年のを見返してみると、結構面白い。みんな一歳ずつ、自分の流儀で年をとっている。終了後、8:00PMに予約しておいて再度「NORMANDIE」。



ミニコミ「四人囃子」はいい歳をした男ども（鉄川、高橋、川崎、団）が、舞鶴児相と、福知山児相に勤務中に、はじめは月刊で、次第に間延びしながらNo. **まで発行した同人雑

誌だ。青焼きコピーで出していた記憶があるから、この二十年ほどでコピー文化が大きく様変わりした事が分かる。

青焼きから、ゼロックス、そしてPC普及と共にプリンターに。この変化は20年で一気にだったことになる。「四人囃子」は青焼きからゼロックスへの時期のことだ。

私の京都市内への転勤で日常の関わりも遠くなり、それぞれの関心も小さくなっていった。この連載原稿の一つ、川崎二三彦「落ちこぼれ家庭」がめっぽう面白かった。毎回奥さんは激怒していたようだが、本当に彼は面目ないことの多い日常を過ごしていた。

これが本にならないかなんて思っていたが、残念ながらこれは埋もれたままだ。しかし彼の文章は、その後沢山の出版物で読めることになる。

私もあれこれ書く方だが、質、量とも彼にはかなわない。調べたり、確認したりして書くのが好きな人だから、感覚で書き飛ばす私とはタイプが違う。彼を見ていると自分がマンガ家であり、パーフォーマーだなあと、改めて思う。

12/29SAT 例年のことだが、掃除をしようとか、かたづけものをやっしまおうとか思うだけで、結局のところ本当のOFFになってしまう。夜ふかしをして、ビデオをハシゴしているうちに大晦日になる。

一九九〇年の年の暮れはこんな風だったのだろう。記憶にあるわけではなく、毎年、年の瀬はこんな風で、正月もバタバタしている間に御用始めがやってくる。

まだ家族七人が揃って、新年のお祝いをしていた頃だ。あれから二十三年、今では夫婦二人きりになった正月を、ことさら感動もなく、出来合いのお節で迎えている。

以上、1990年（平成二年）終了